

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：32205

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23344

研究課題名（和文）学生の多様化と大学中退の関連 多様化のとらえ方を再考する

研究課題名（英文）The Relationship between Student Diversification and College Dropout:
Reconsidering the View at Student Diversification

研究代表者

下瀬川 陽 (Shimosegawa, Minami)

作新学院大学・人間文化学部・講師

研究者番号：90846510

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大学教育の量的拡大に伴って生じた学生の多様化が、どのように大学中退と結びついているのかを検討することであった。当初の研究計画を大幅に修正し、歴史的に典型的な進学層ではなかった出身階層の低い学生における心理的・文化的摩擦という観点から中退メカニズムを検討した。その結果、大学内の学生層の分散が小さい場合には、学生同士の関わりが中退意思にもたらす影響が見られないこと、むしろ父親の学歴が高く典型的な学生層である場合に、心理・社会的要因による中退リスクが大きくなること、中退者は大学教育に対して明確な期待やスタンスを持っていないため、摩擦という観点は適切ではないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの研究においては、大学を含む高等教育の大衆化に伴う課題は、主に低学力層の進学の観点から議論がなされてきた。しかしながら本研究では、学力以外の観点から、非典型的な進学者が抱えている問題点と、それが中退へ結びつくメカニズムに関する手掛かりを得た。非典型層の進学者に見られるとされる心理的未熟さという側面に対して、「どのように未熟なのか」を大学教育に対する期待やスタンスという新しい観点から検討した。大学中退を、各大学の学習支援上の課題のみならず、大学教育システムが内包する社会的不平等という側面からとらえる契機となりうる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine how the diversification of students that has accompanied the quantitative expansion of college education is linked to college dropout. The original research plan was substantially modified to examine dropout mechanisms in terms of psychological and cultural frictions among students from lower social background, who historically have not been the typical group of students entering college. The results showed that when the dispersion of student groups within a university is small, there is no effect of student interactions on dropout intentions; rather, the risk of dropping out due to psychological and social factors increases when the father is a typical student group with a high educational background; and the frictional perspective is not appropriate because dropouts do not have clear expectations or stances toward college education.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

研究分野：教育社会学

キーワード：大学中退 心理的・文化的摩擦

1. 研究開始当初の背景

いまや日本の大学進学率は 50 パーセントを超え、ユニバーサル段階を迎えている。その一方で、大学中退者もまた漸増傾向にある。大学教育の重要性が増大している今日において、中退者の増加は看過できる問題ではない。しかしながら日本における大学中退は、大学教育システム全体の問題というよりは、各大学がそれぞれの現場において取り組むべき実践上の課題として向き合われることが多く、ゆえに学術的研究の蓄積も極めて薄い。

従前より大学を含む高等教育の大衆化にともなう学生の多様化が指摘されてきたが、これは中退者の増加にも無関係ではないと考えられる。なぜなら、中退率は大学によって大きく異なっており、こと大学教育の大衆化を担ってきた私立・非エリート大学において高いからである。ここには、大衆化に伴い新たに登場した学生層と、大学教育システムまたは大衆化以前から存在した学生層との間の摩擦を検討する余地がある。これに対し日本の中退研究は、私立・非エリート大学の中退率の高さを、学生個人の学力不足や心理的未成熟さ、あるいは当該大学が提供するリソースが不十分であることなど、大学間の隔たりに着目することで説明しようとしてきた。

2. 研究の目的

本研究の核心をなす問いは、大学教育の量的拡大に伴って生じた学生の多様化が、どのように大学中退と結びついているのかということである。学力(言い換えれば入学偏差値)以外の多様性に着目し、大学間/大学内の分散両方から中退率の差を生み出すメカニズムにせまること、および多様な学生層の間の心理的・文化的摩擦という観点から中退メカニズムにせまることで、多様化の様相をとらえ直すことを当初の目的としてきた。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行の影響に鑑み、当初の研究計画の実施は難しいと判断したため、後者のリサーチクエスションに焦点を絞った。すなわち、歴史的に典型的な進学層ではなかった出身階層の低い学生における心理的・文化的摩擦という観点から中退メカニズムを検討した。

3. 研究の方法

リサーチクエスションを修正すべく、既存調査データを利用し予備的分析を行った。

1. 東北地方の国立大学社会科学系学部の 1 年生から得たホールネットワークデータを用いて、確率的アクター志向モデルにより分析を行い、学生同士のネットワーク構造の変化と中退意思との関連を検討した。
2. 既存のインターネットモニター調査データを用いて、クラスター分析および多項ロジットモデルを用いて、中退タイプの析出と出身階層および中退時期との関連を検討した。以上を含めた検討を通して、2 に述べたとおりリサーチクエスションを再設定し、
3. 大学を卒業・中退後 5 年以内の男女を対象として、インターネットモニター調査を行った。構造方程式モデリングにより、特に出身 SES、本人の大学進学の実現可能性の捉え方と、中退選択の関連を検討した。

4. 研究成果

以下、段落冒頭に付している数字は、「3. 研究の方法」に示した各方法に対応している。

1. 分析の結果、ネットワーク指標を用いて操作化された学業的統合は、中退意思と関連を持たなかった。用いたデータは、入学難易度が比較的高い国立大学において収集されたものであり、学業へのモチベーションや大学における学びへの親和性が高く、大学内の学生層の分散が小さい。そのような場合は、学生同士の関わりが中退意思にもたらす影響が見られないことを明らかにした。

下瀬川陽, 2021, 「社会ネットワーク分析を用いた大学中退選択メカニズムの検討」『流通経済大学情報学部紀要』25(2): 143-154.

2. クラスタ分析の結果、5つの中退タイプを得た。そのうち、友人関係でのトラブルや心理・社会的要因が大きい中退タイプについては、多項ロジットモデルの結果から、父親が高学歴である場合に見られやすいことがわかった。また、特に学業面での不振・不満による中退は、人間関係におけるトラブルや大学への適応感、居場所の無さを経験する割合も大きく、学業不振を必ずしも基礎学力のみに帰すことができない可能性があることを明らかにした。

下瀬川陽, 2021, 「大学中退理由の複合性と、中退時期との関連の探索的検討」日本教育社会学会第73回大会報告.

3. 現時点では分析モデルの精緻化に取り組んでいる最中であるため、暫定的な結果を以下に示す。すなわち、出身SESにより、大学進学をどれだけ実現可能なものと捉えているかには違いがあるが、大学進学の実現可能性の捉え方は、中退選択に影響しない。さらに、中退者は大学教育に対して明確な期待やスタンスを持っていない。以上より、入学時点までの文化的背景と、入学後の実態との摩擦が生じているとまでは言えず、むしろそれらが空白であるためにモチベーションを保ちづらいことが予想される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 下瀬川陽	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 社会ネットワーク分析を用いた大学中退選択メカニズムの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 流通経済大学流通情報学部紀要	6. 最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 下瀬川陽	4. 巻 -
2. 論文標題 大学等中退者の初職離職リスクについての検討 「中退者は辞めやすい」は本当か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会学年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下瀬川陽
2. 発表標題 大学中退理由の複合性と、中退時期との関連の検討
3. 学会等名 日本教育社会学会 第73回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------